

は
八 重 地 区 遺 跡

(前畠第2・砂田遺跡)

県営農地保全整備事業八重地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査概要

1991

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会



前畠第2遺跡（上段）、砂田遺跡（下段）調査着手前風景

序

田野町は、宮崎市に接しながらも、^{わにつか}鰐塚山や青井岳をはじめとする豊かな自然に恵まれた町であります。

町では農地保全整備事業等に力を入れており、農産物の質量は全国に誇るものであります。

また近年は、リゾート開発・宅地開発・企業誘致が推進され、これまでと違った面でも発展を遂げております。

しかし、その一方で開発行為に伴い、埋蔵文化財の現状保存が非常に困難となって参りました。これら消滅の避けられないものについては、発掘調査による記録保存の措置をとっております。

今年度も教育委員会では、県営農地保全整備事業に伴い、八重地区遺跡発掘調査を実施しました。

調査の結果、縄文時代早期（約8,000年前）後期（約3,500年前）の集石遺構や土坑と石器・土器などの遺物、中世のものと思われる溝が確認されました。

これらの埋蔵文化財は町の貴重な財産であり、宮崎県の歴史を語るうえでも欠くことのできないものになると確信しております。

調査にあたりましては、台風等による災害がでているにもかかわらず、地元の方々をはじめ関係者の皆様の並々ならぬご理解を賜りましたこと、誠に幸甚の至りであります。

ここに記して深く感謝の意を表するものであります。

田野町教育委員会

教育長 鍋 倉 政 信

例　　言

1. 本書は、平成2年度八重地区県営農地保全整備事業に伴う八重地区遺跡発掘調査（前畠第2遺跡・砂田遺跡）の概要を報告するものである。
2. 調査は、次の体制でおこなった。

調査主体	田野町教育委員会
調査担当	宮崎県教育庁文化課 田野町教育委員会社会教育課
庶務担当	同
調査指導	宮崎県教育庁文化課

主事 長友 郁子
森田 浩史
主査 柳間 靖子
3. 調査は、前畠第2遺跡を長友郁子が、砂田遺跡を森田浩史がそれぞれ担当した。
4. 調査現場の記録写真は、長友と森田がそれぞれ撮影し、一部を（株）スカイサーベイに委託した。
5. 現地における作業には、八重地区をはじめ広く町民の参加を得た。
6. 室内での遺物・図面整理作業には、川越小百美、鶴田明子、富中優子、戸村晴美、伊集院康子、押川保子、森美知子、横山千穂らの補助を得た。
7. 本書の作成は、第1章・3章を森田が、第2章を長友が担当した。
8. 砂田遺跡の本文で用いた遺物番号は、遺物図版、写真図版の番号と共通する。
9. 本書で用いた標高は、全て海拔高である。
10. 現地調査・遺物整理作業等の実施にあたっては大分県文化課、熊本県文化課、鹿児島県文化課、宮崎県文化課、城南町教育委員会、並びに清田純一、島津義昭、新東晃一、宍戸章氏はじめ埋文関係者各位の貴重な助言を頂いた。

本　文　目　次

第1章 はじめに

1. 調査に至る経緯
2. 遺跡の位置と環境

第2章 前畠第2遺跡の調査

1. 調査区の設定
2. 調査の概要
3. 基本層序
4. 検出遺構
5. 出土遺物
6. おわりに

第3章 砂田遺跡の調査

1. 調査区の設定
2. 包含層の状態
3. 検出遺構
4. 出土遺物
5. おわりに

挿　図　目　次

- 第1図 町内遺跡分布図
- 第2図 八重地区周辺地形図
- 第3図 調査区周辺地形図（前畠第2遺跡）
- 第4図 基本層序柱状図
- 第5図 集石遺構4実測図
- 第6図 土坑4実測図
- 第7図 遺物実測図（土器）
- 第8図 遺物実測図（土器）

第9図	遺物実測図(土器・石器)(前畠第2遺跡)	12
第10図	基本層序柱状図(砂田遺跡)	15
第11図	調査区周辺地形図	16
第12図	調査区概要図	17
第13図	集石遺構1・7実測図	19
第14図	土坑6・13実測図	20
第15図	遺物実測図(土器)	23
第16図	遺物実測図(土器)	24
第17図	遺物実測図(土器)	25
第18図	石器実測図	26

写 真 図 版

(前畠第2遺跡)		(砂田遺跡)
図版1	B・C区全景	図版11 調査区全景
	A区全景	12 A区遺物出土状況
2	B区全景	B区 "
	C区全景	13 E区遺物出土状況
3	B区土坑4検出状況	F区 "
	C区集石4検出状況	14 確認トレンチ全景
4	C区集石検出状況	土坑18遺物出土状況
	C区溝1断面	15 土坑18検出状況
5	縄文時代の遺物(土器)	土坑9検出状況
6	"	16 集石1検出状況
	"	集石7 "
	"	17 A区の出土遺物
	"	18 B区の出土遺物
9	" (土器・石器)	19 C・D・E区の出土遺物
10	A区東壁土層断面	20 F区の出土遺物
	条痕文土器出土状況	21 F区の出土遺物
		22 縄文時代後期の遺物
		23 石器

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

八重地区は、昭和63年度から県営農地保全整備事業を行っており、平成2年度は前畠地区と砂田地区が事業の対象区となった。そのため、早急に埋蔵文化財の所在の有無を確認する必要が生じ、平成2年2月に県文化課による試掘調査が行われた。調査の結果、両地区とも、ほぼ全域にわたって埋蔵文化財の所在が確認された。

同年4月20日には県中部農林振興局、県文化課、町教育委員会の三者間で遺跡の保存について協議し、その後も再三にわたり調整を行った。6月には工事設計もほぼ決定し、工事施工上やむをえず消滅する部分についてのみ、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。6月13日には八重地区公民館において、地元土地改良区役員、地権者に対する説明会を行った。

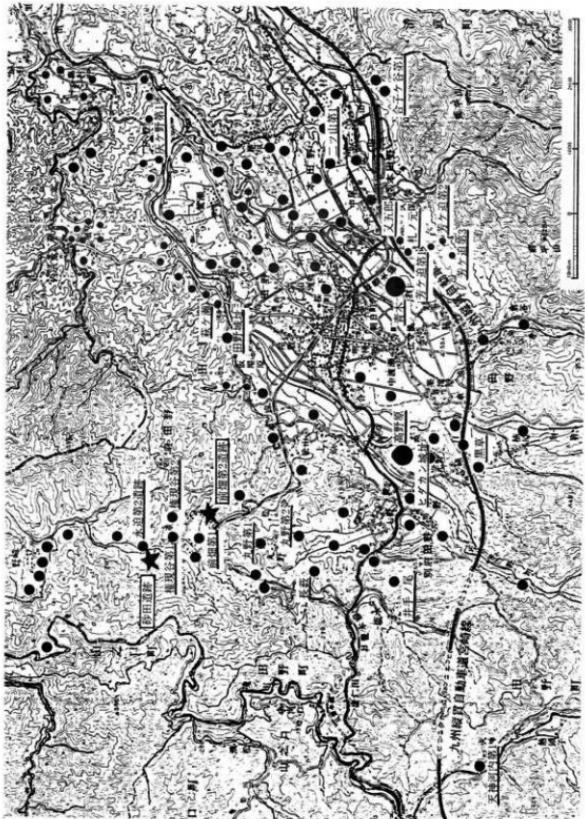
発掘調査予定の面積に相反して、調査期間等は非常に厳しいものがあり、町教育委員会のみでは対応できないと判断し、県文化課に調査員の派遣を依頼した。その結果、砂田地区を町教育委員会が、前畠地区を県文化課の派遣職員がそれぞれ担当して行うこととなった。

前畠地区は同年8月2日から、砂田地区は9月5日から調査に着手した。しかし、10月に入って再度にわたる台風の災害を受け、前畠地区的調査予定地や砂田地区的調査区境界が陥没するなど、調査の進捗にも多大な影響を受けた。現地における作業は、前畠地区を同年12月11日に、砂田地区を11月30日に全て終了した。

第2節 位置と環境

田野町は、宮崎市の西方約20kmを中心とする田野盆地とそれを囲む鰐塚山系他の山々からなり、八重地区はその北西の松山川左岸にある台地上に広がる。

町内の遺跡は現在の畑地とその周辺及び河岸段丘上の大半に分布し、平成2年度までに総数115か所が確認されている。以下、町内の主な遺跡を



第1図 町内遺跡分布図

概観しながら八重地区遺跡の歴史的環境についてふれておきたい。

旧石器時代は、萩ヶ瀬遺跡をはじめ、昭和58年から59年にかけて調査した芳ヶ迫第1・第3遺跡、札ノ元遺跡、昭和63年度調査の長蔵遺跡がある。八重地区においては、試掘調査等の度に所在の可能性が示唆されているが、現在のところ明確な資料はない。

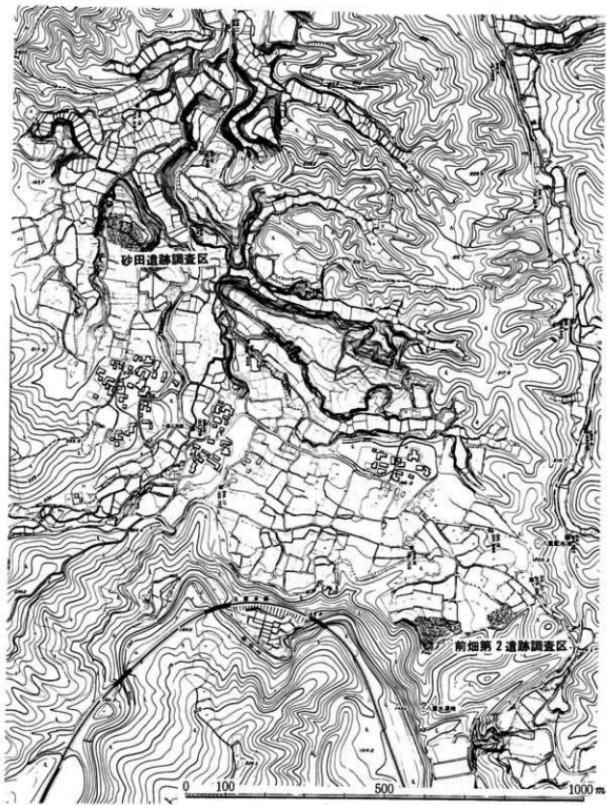
縄文時代の遺跡はもっと多く、中でも早期の遺跡は各地に所在し、遺跡分布図の大半を占める。調査済の遺跡に前平地区の遺跡群をはじめ、丸野第2遺跡、長蔵遺跡、二ツ山第1遺跡、井手ノ尾遺跡、八重地区遺跡がある。八重地区遺跡については現在9遺跡あるうちの全てに確認されている。前期は丸野第2遺跡、長蔵遺跡と八重地区遺跡（権現谷第2遺跡）からも少量ながら出土している。中期の資料は、丸野第1遺跡出土の凹線文土器が出土したのみである。後期は丸野第2遺跡、黒草遺跡、青木遺跡などがある他、今年度調査の八重地区遺跡（砂田遺跡）から土坑内一括遺物として出土している。晚期は丸野第1遺跡、芳ヶ迫第1・第3遺跡がある。弥生時代は丸野第2遺跡で中期の土器が、八重地区遺跡（権現谷第1遺跡）で後期初頭の竪穴住居跡が検出されている。

古墳時代は灰ケ野第1遺跡、高野原遺跡で地下式横穴墓が検出されているが、遺物散布地などは確認されていない。

奈良時代の考古資料は現在のところ皆無であるが、平安時代に至っては合子ヶ谷遺跡で布目痕土器と土師器が出土した他、町内各地に表探遺跡がある。

中世以降については山城や社寺・墓地などがあるが、文献等を含めて今後検討を要する時代である。芳ヶ迫第2遺跡では、備前焼の甕・東播系片口鉢や青磁器などが出土している。

以上のように、田野町は縄文時代の遺跡が大半であり、植生がこの時代の生活に最も適していたことを物語っており、八重地区遺跡もこれにあてはまるものである。しかし、住居跡の確認された遺跡は少なく、大半がキャンプサイト的なものであった可能性も考える余地があり、各遺跡・遺跡群間における出土遺物や検出構造の様相を含めた比較検討は、今後の重要な課題となるであろう。



第2図 八重地区周辺地形図

- 4 -

第2章 前畠第2遺跡の調査

第1節 調査区の設定

前畠第2遺跡は、宮崎県宮崎郡田野町乙1348番地外に所在する遺跡で八重地区の東側台地の南端部にある。平成元年度に調査が行われた前畠第1遺跡から約400m~500m離れている。台地は北東方向に伸びているが、当遺跡周辺では南東から西に向かって小さな谷が屈曲しており、その谷の南端を挟んで東側をA区とし、西側にB・C区を設定した。但しC区に関しては、調査時において便宜上北側部分をC区、南側部分をD区として遺物の取り上げ等を行った。調査対象面積は6,000m²であった。

第2節 調査の概要

遺構は、C区において中世と考えられる箱矢研の溝状遺構が2本と時期不明の溝状遺構が1本検出された以外は、縄文時代のものと考えられる土坑と集石遺構のみである。土坑はB区で7基、C区で9基、集石遺構はA区で3基、B区で1基、C区で8基検出された。

遺物はC区から中世の土器片が数点出土した以外はほとんどが縄文時代早期の土器片と石器を中心とした定形石器、多量の黒曜石の剥片・残核である。

調査の期間中3度にわたる台風の接近に遭い、それに伴う大雨の影響でC区の北側部分が約300m²にわたって陥没するという事故が発生した。そのため、実際に掘り下げた面積は4,400m²程度に減少した。

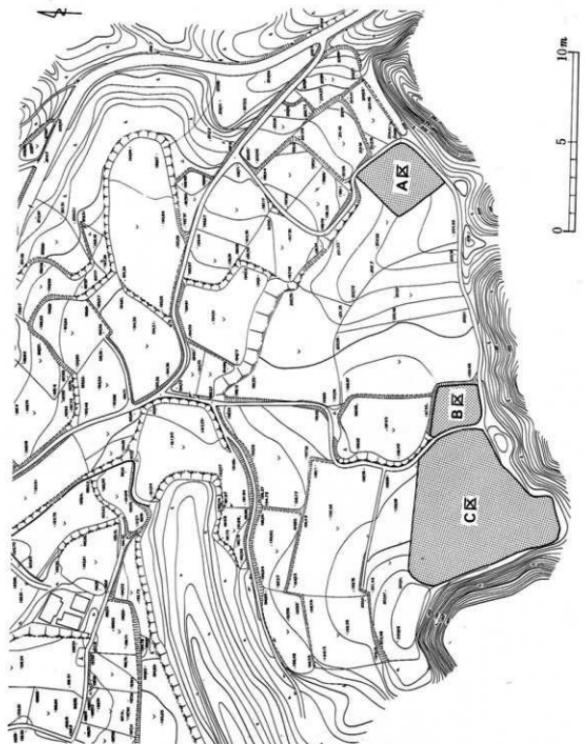
第3節 基本層序

I層：暗褐色軟質土（Hue10YR 3／3）

現在の耕作土である。粘性が少なく軟らかい。下部にアカホヤの細かなブロックを少量含む。

II層：黒褐色軟質土（Hue10YR 2／2）

基本的に当遺跡は過去に削平を受けており、その時に置かれた客土であると考えられる。やや粒子が粗く、I層よりややしまっ



第3図 調査区周辺地形図

- 6 -

ている。

III層：赤黒色軟質土（Hue2.5YR1.7／1）

堆積の状況から現在の畑を作る前の旧耕作土であろう。やや粘性を帯びておりII層よりも粒子が細かく軟らかい。

IV層：黄橙色硬質土（Hue10YR7／8）

純粹なアカホヤ層である。堅く締まっている。下部に直径2～3mmのパミスを多く含む。

V層：黑色硬質土（Hue10YR1.7／1）

いわゆるカシワバン層である。堅く粘性が強いが、VI層下部のパミスを多く含む。

VI層：暗黒色硬質土（Hue10YR3／3～Hue10YR3／4）

色はV層よりも明るくやや軟らかくなるが、V層同様パミスを全体に多く含む。色調は上部がやや黒く下部は明るくなるが、所々に雲状に暗色分がある。

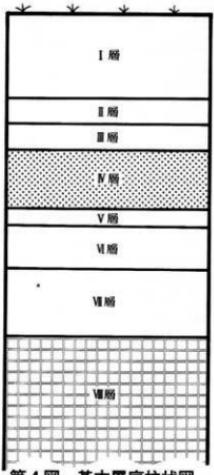
VII層：褐色軟質土（明色部Hue10YR5／6、暗色部Hue10YR4／4）

VI層より軟らかくやや粘性が強い。VI層同様に暗色部と明色部があり、下部にいくにしたがって明色部が多くなっている。下部に小林軽石が入るロームのブロックをやや多く含む。

この層の上部とVI層の下部が遺物包含層である。

VIII層：黄褐色軟質土（Hue10YR5／6）

いわゆるシラス層である。水による作用により黄褐色に変色したものと考えられる。下部にいくにしたがって明るい色となる。



第4図 基本層序柱状図

- 7 -

第4節 検出遺構

前畠第2遺跡において検出された遺構は、溝状遺構・集石遺構・土坑の3種類である。

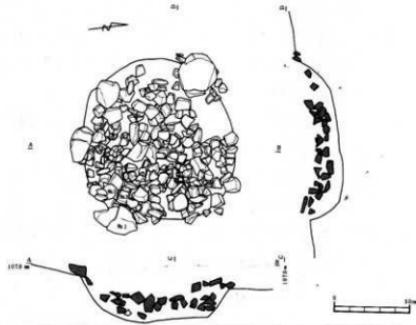
C区北側部分で検出された3本の溝状遺構は、南に伸びる台地を完全に切断している。溝の掘かたは溝1はU字状で、溝2・3は箱矢研堀である。深さは溝1が50~80cmであるが、溝2・3は1.5~2mと深い。また溝1と溝2の間隔は約18mある。溝2・3の間隔はわずか4~5mである。

集石遺構は、堀内に配石を持つものではなく10cm角以内の小振りの礫を用いるものが多い。

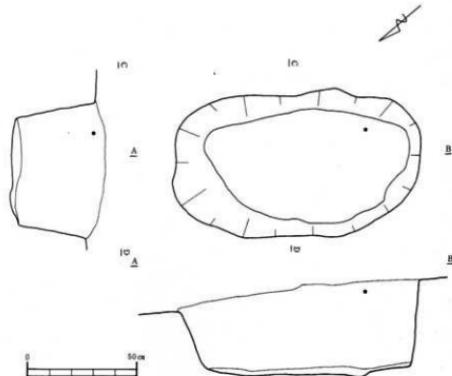
土坑は16基検出されているが埋土は全て同一で、埋土中に均一に御池ボラが入っているので時期としては後期の可能性が高い。

第5図はC区の集石4である。当遺跡の集石の中では最も大型のものである。配石は持たないが、礫は中心に向けて窪んで入っている。石は主に10cm角以内の小振りのものを使用しており、熱を受けている。№1・№2は焼成された粘土板である。この集石の時期は遺物により縄文早期と考えられる。

第6図はB区の土坑4である。隅丸方形にちかい梢円型プランを呈する。図中のドットは、遺跡の出土位置を示している。性格、時期共に不明である。



第5図 D区集石遺構 4 実測図 S = 1 / 20



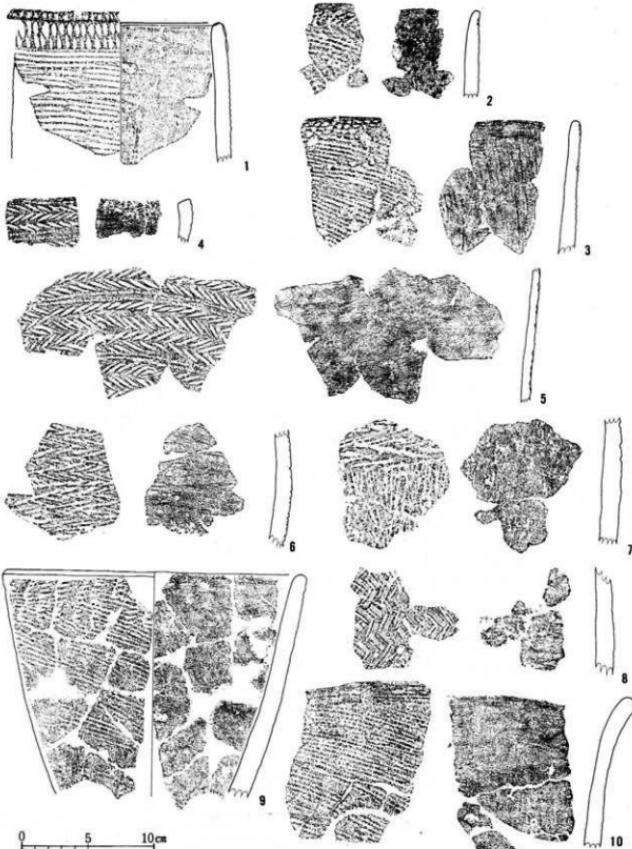
第6図 B区土坑 4 実測図 S = 1 / 20

第5節 出土遺物

出土した遺物のほとんどは縄文時代のものであり、特に土器は縄文早期のものが主体である。遺物の全体量としては比較的少ないが、その中で黒曜石の剥片やチップが占める割合はかなり高い。

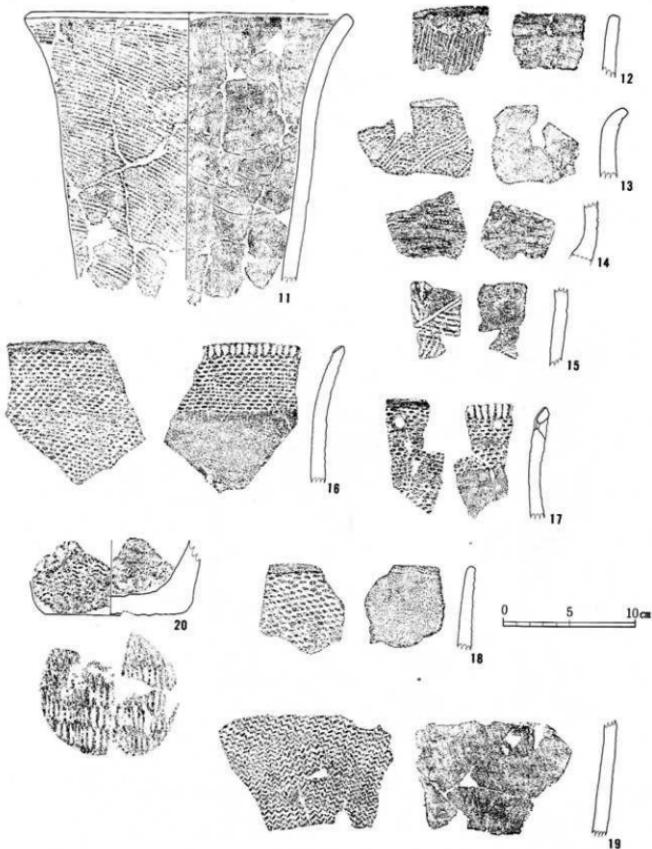
第7図～第9図は出土遺物の実測図である。土器に関する詳細は後頁に観察表を掲載しているのでそれを参照されたい。

第9図の石鎌は本遺跡出土の石鎌の中でも最も大型のものである。不純物を疎らに含む黒曜石を使用している。第9図のスクレイパーも石材は黒曜石を使用している。小型で刃部の作りも簡単である。また両面に加工を施し、刃部を作り出している。



第7図 遺物実測図 S = 1 / 3

- 10 -

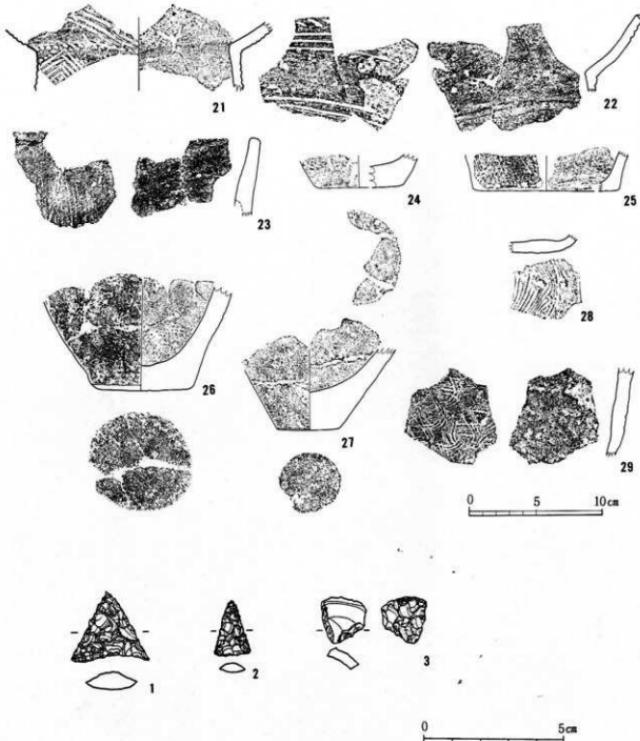


第8図 遺物実測図 S = 1 / 3

- 11 -

第9図 遺物実測図 $S = 1/3$ (石器は $2/3$)

- 12 -



第6節 おわりに

調査の結果、前畠第2遺跡は前年度調査された前畠第1遺跡同様、縄文時代早期を中心とした遺跡であることが判明した。

縄文土器は前平式土器をはじめとして条痕文土器、平柄式土器、無文土器等早期の土器が出土している。また、土器量に対して黒曜石のチップの量が極めて多量で、住居跡等の遺構がほとんど伴わなかったため遺跡は極めて長い期間にわたって断続的にキャンプサイトとして使用されたものと考えられる。

第8図の押型文底部は網代底であり、縄文早期のものとしては熊本県下益城郡城南町御領貝塚、鹿児島県姶良郡溝辺町東原遺跡などの出土例に続くものである。宮崎県に於いては宮崎学園都市遺跡の田上遺跡に続き2例目である。また、第9図の平柄式土器の器形は深鉢としたが、文様や頸部の屈曲の度合、頸部内面に綾を作り出していることなどから、現在鹿児島県などで希に見られる鉢壺形土器の可能性も考えられる。しかし、現時点ではどちらかの器形に決定することは困難なので本報告までに検討したい。以上のこととふまえながら、近接遺跡である前平遺跡群や他地域の熊本県、鹿児島県の遺跡群との比較検討を行って、当遺跡の性格および特徴を本報告の中で明らかにしていきたい。

〔註〕新東晃一、岩永哲夫両氏のご教示による。

参考文献

- 菅付和樹 「田上遺跡」 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第3集
1985 宮崎県教育委員会
- 岡本満子 「底部に圧痕を有する縄文式土器について」 鹿大考古 第5号
1986 鹿児島大学法文学部考古学研究室

第3章 砂田遺跡の調査

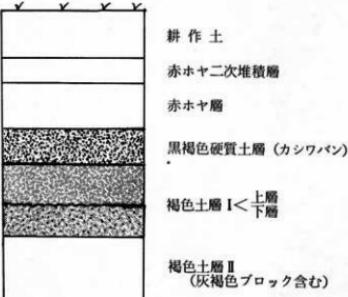
第1節 調査区の設定

砂田地区は、前畠地区からさらに北西へ入ったところの台地上に位置し、そのほぼ全域が周知の遺跡（砂田遺跡）となっている。台地は集落のある南側から北側に向かって拡がり、中央付近で二股に分かれる。調査は台地北側の標高が高くなる切土部分を対象とし、調査区を地形及び調査の都合上から、便宜的にA・B・C・D・E・Fの地区と確認トレントを設定して実施した。調査面積は、A区を1,130 m²、B区を520 m²、C区を1,166 m²、D区を600 m²、E区を570 m²、F区を490 m²、確認トレントを24 m²の総計4,500 m²で終了した。

第2節 包含層の状態

砂田遺跡の基本層位は、上面から耕作土・二次赤ホヤ層・赤ホヤ層・黒褐色土層（硬質）・褐色土層1（明確な線引きはできなかったが、上層と下層が見られる）・褐色土層2まで確認した。

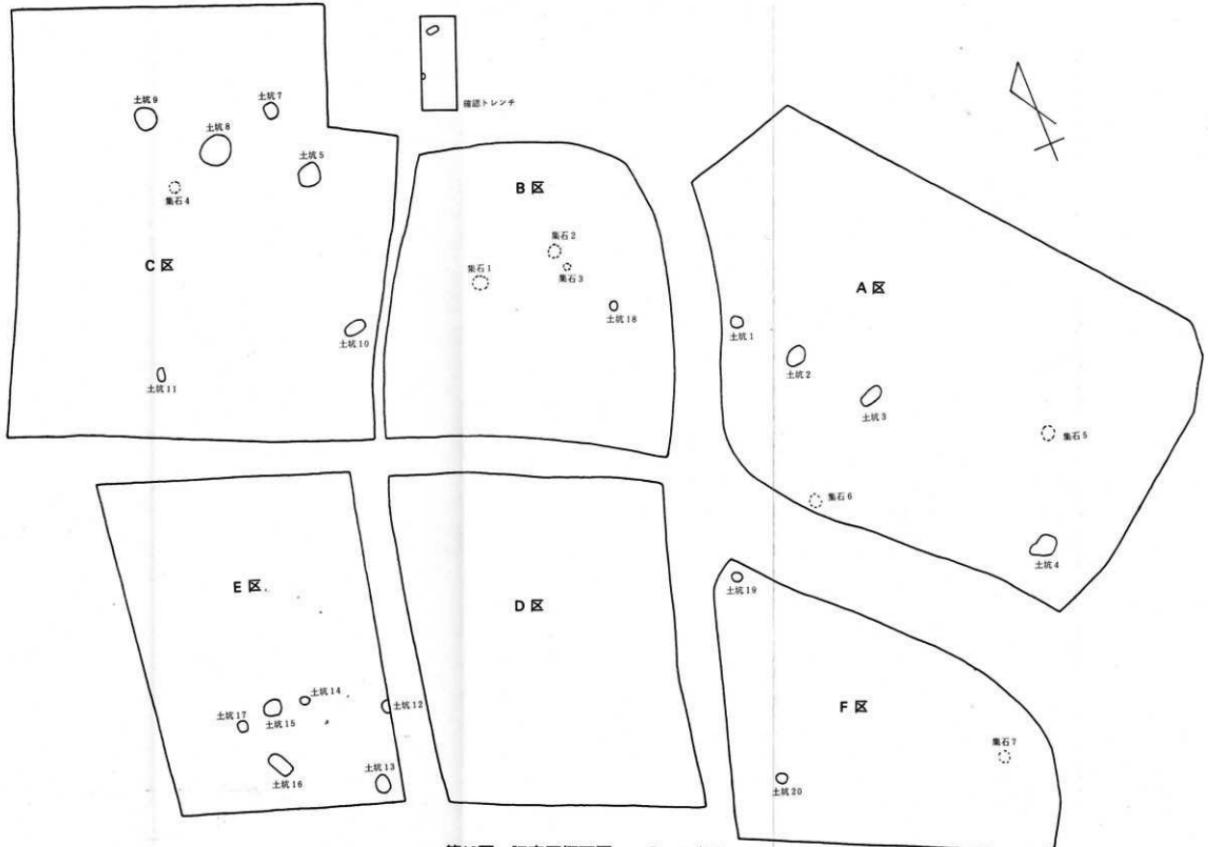
このうち遺物包含層は、黒褐色土層と褐色土層1（いずれも縄文早期）であるが、大半は褐色土層の上層からの出土である。これより新しい時期の包含層はすでに耕作等により削平されたものと見られる。赤ホヤの堆積はB区とC区の一部において確認したが、A区・D区では黒褐色土層すら残存しない状況であった。



第10図 基本層序柱状図



第11図 調査区周辺地形図



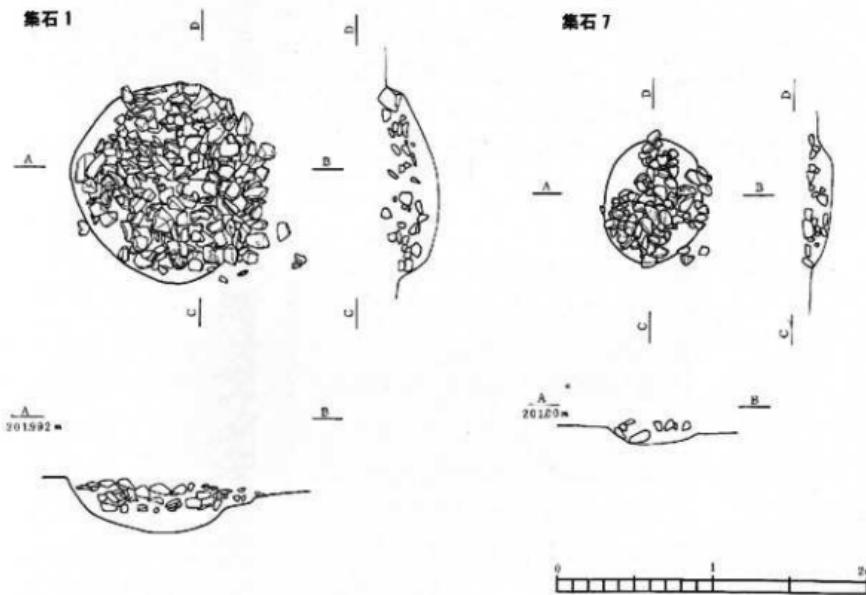
第12図 調査区概要図 S = 1/400

第3節 検出遺構

集石遺構がA区・B区・C区・F区から7基、土坑がD区を除く全域から20基、それぞれ検出された。

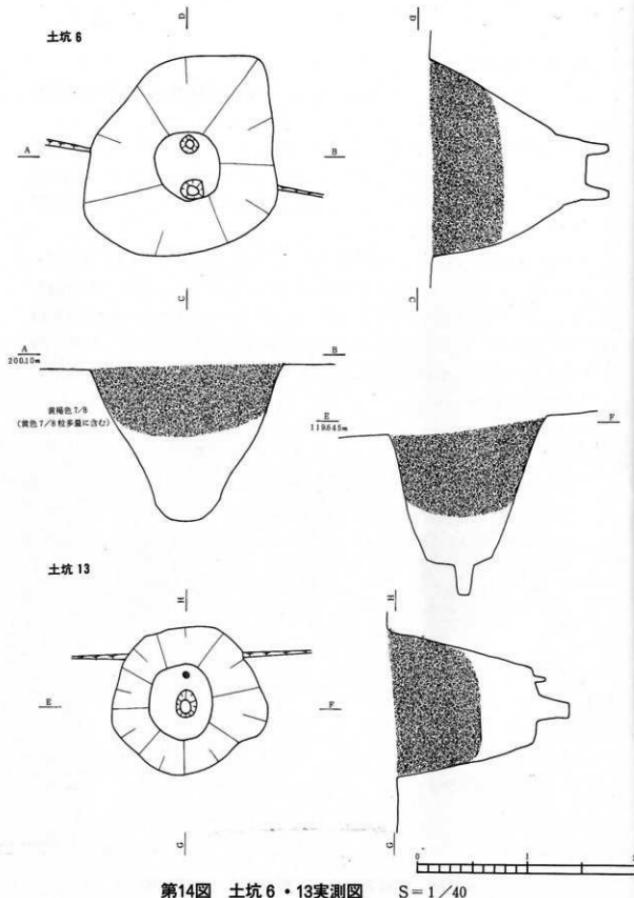
集石遺構には、石の状態が密なもの（集石1・2・7）と粗なもの（集石3・4・5・6）があり、いずれも褐色土層1上層内において検出した。集石1・2・6・7は土坑を伴う。遺物は少ないが、集石1・2から押型文土器（15・16）が出土している。

土坑には円形・長方形・椭円形のものなどがある。土坑6・8・9・13・18は円形で、深く、底面に2ヶ所以上のピットを配する。これらの特徴から、貯蔵穴などの用途が考えられる。土坑1・18の埋土内から縄文後期の土器（64～67）が出土しており、この時期に埋没したものと見られる。他の土坑についても埋土がほぼ共通していることから、同じく後期のものとして捉えておきたい。



第13図 集石遺構1・7実測図

S = 1 / 40



第14図 土坑 6・13実測図

- 20 -

第4節 出土遺物

縄文時代早期の土器・石器が黒褐色土層(17・19・20・91)、褐色土層1(1~13・21~25・28・29~31・33~39・41~56・58~63・68~74・78~80・83~89・92~95)及び集石造構内(15・16)及び耕作土内から、後期の土器が土坑埋土内から出土している。

早期の土器は押型文土器、貝殻文土器、縄文土器、手向山式土器、平拵式土器、塞ノ神式土器などが見られる。ここでは器形・文様等から次のように分類した。

I類 爪形文を施す土器。

- a ヘラ状施文具の刺突による爪形文を連続的に施すもの。(54)
- a' aの口縁部。(10・51)
- b 肥厚する口縁部外面およびその直下に爪形文を施すもの。(49)

II類 貝殻文を主体とする土器。

- a 口縁端部に貝殻刺突文をめぐらせ、体部に条痕を施すもの。(31)
- b 縦方向と横方向に貝殻条痕文を施すもの。(63)
- c 斜方向に貝殻条痕文を施すもの。(56)
- d 横方向に貝殻条痕文を施すもの。(11・59・60・61)
- e クサビ形貼付突帯を有し、貝殻条痕を地文とし貝殻腹縁による刺突文を施すもの。(3)
- e' eの肩部(47・53・55)
- f 口縁部外端に貝殻によるキザミ目を施し、その直下に貝殻腹縁による押し引き文を施すもの。(2・39・43)
- g 貝殻腹縁による刺突線文を施すものの口縁部。(12)
- h 貝殻腹縁による刺突線文を横方向に直線的に施すもの。(4)
- h' hの口縁部で内傾するもの。(1)
- i 貝殻腹縁による刺突文を綾杉状に連続させるものの口縁部。(6)
- j iと同じ施文で、口縁部が内傾するもの。(46)
- k 貝殻腹縁による刺突線文とヘラ状施文具による綾杉状の文様とを組み合わせせるもの。(7)

III類 縄文を施す土器。(44)

- 21 -

IV類 ヘラ状施文具による沈線文を綾杉状に施す土器。(5・8・42)

V類 押型土器。

a 楕円押型文を施文するもの。(14~16)

b 山型押型文を施文するもの。(9・35~37)

b' 山型押型文の施文が浅く間延びするもの。(13・26・48)

VI類 外面と口縁部内面に2条の沈線文を波状に施す土器。(38)

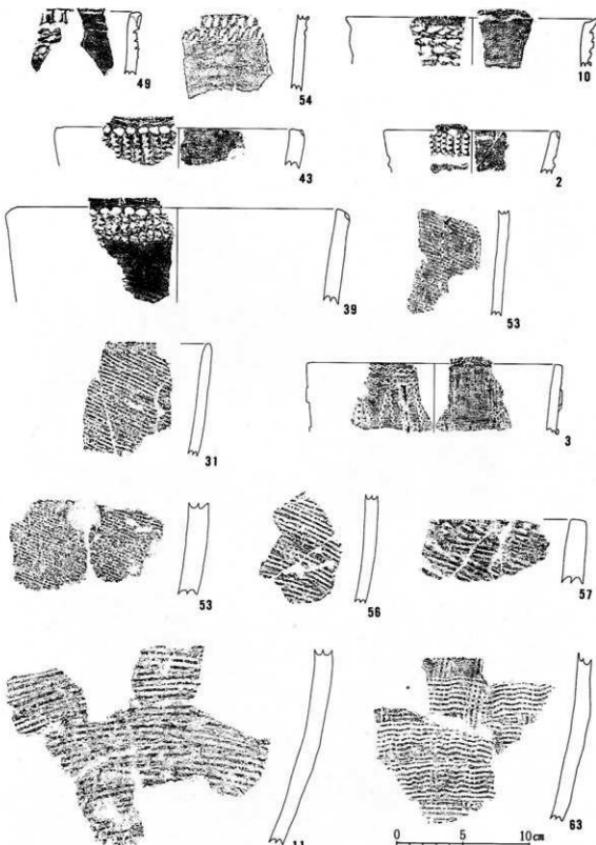
VII類 平捺式土器。(17・22・24・25・32・34・40)

*壺形土器(20)

VIII類 塞ノ神式土器(19・21・23)

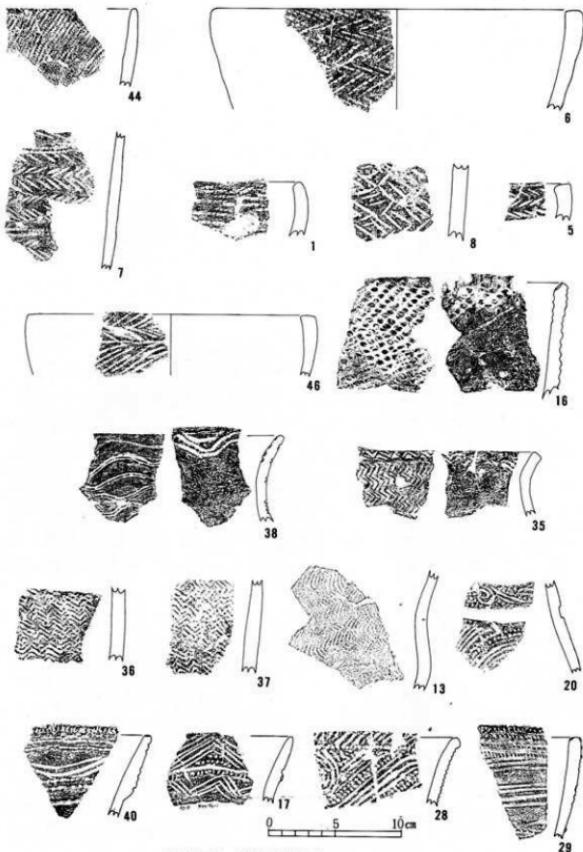
後期の土器は口縁端部に刻目をもち、内面に条痕ののちナデ、外面に凹線文を施す岩崎式土器に類似するもの(64・65)と、肥厚する口縁部下とその体部に沈線文を施すもの(66・67)がある。

石器は、石鎌(83~96)、石斧(75・76)、くぼみ石(77)、磨石(78~82)、石皿の他、石核や剥片(68~74)などが出土している。くぼみ石(77)は赤色に焼けた痕跡があり、焼石に転用されたものである。石鎌の石材には、黒曜石(姫島産を含む)、チャート、頁岩などが使用されている。形状は無茎鎌のみで平基式が1点(84)みられた他は全て凹基式であった。磨石の(82)は尾鈴山麓産の火山性酸性岩類であるとの分析を得ている⁽¹⁾。これらの石器は早期を中心とするが、耕作土内より出土したものについては、後期に属するものも若干あるとみられる。



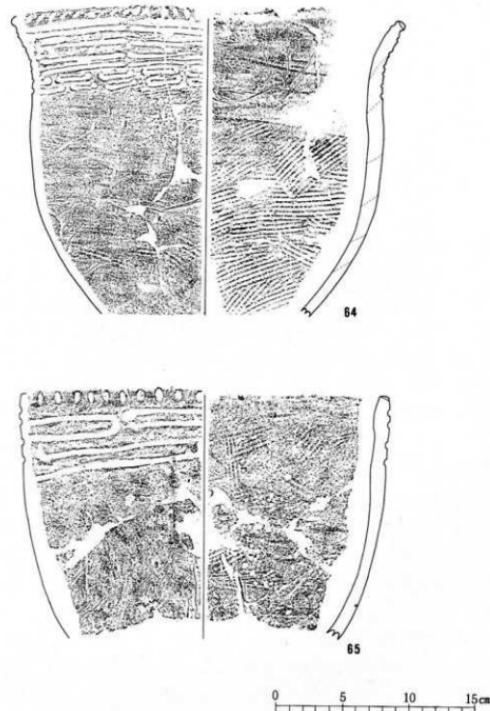
第15図 遺物実測図

S = 1 / 3



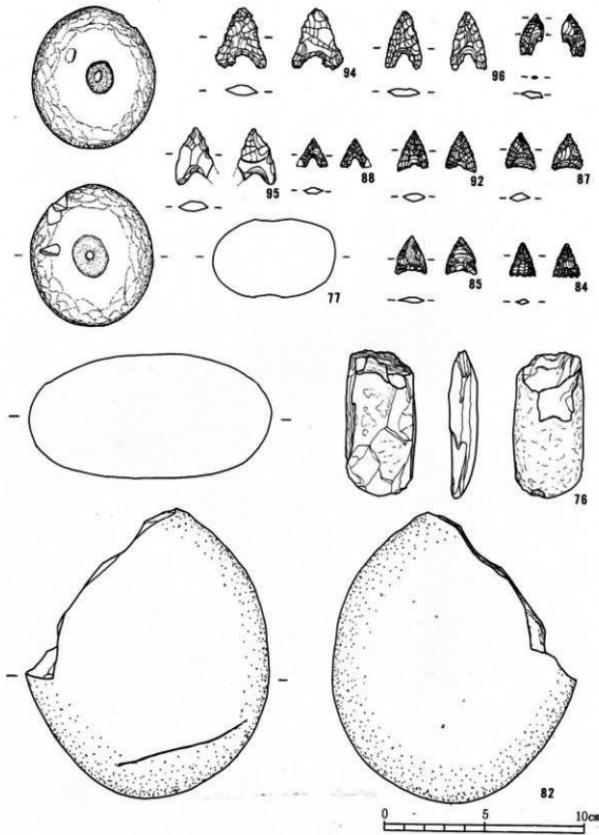
第16図 遺物実測図 S = 1 / 3

- 24 -



第17図 遺物実測図 S = 1 / 3

- 25 -



第18図 石器実測図

S = 1 / 2

第5節 おわりに

発掘調査の結果、砂田遺跡は縄文時代の早期を中心として、後期にも営まれた遺跡であることがわかった。

早期については、集石遺構を検出したが住居跡やピットなどは検出されず、この近辺を居住域としていたか、或いはキャンプサイト的な性格の遺跡であった可能性が考えられるが、町内の発掘調査例を見てもこのよう傾向が強く、その判断に課題を残すものとなった。

出土遺物は第4節で分類したように、かなりの時間的な幅がみられる。II類 a は口縁端部に貝殻刺突文をめぐらせ、胴部に斜位の条痕を施す前平式土器で、II類 e・e' は口縁部に貝殻刺線文をめぐらせ、その下位に貝殻条痕文を地文とし、クサビ形貼付突帯と縦位あるいは斜位の貝殻刺線文を施す吉田式土器である⁽²⁾。これらの中に角筒土器はみられなかった。II類 b~d は貝殻条痕を施すもので、おおよそ吉田式かそれに近い時期に収まるものである⁽³⁾。II類 f は口縁端部に貝殻の押圧によるキザミ目をめぐらせ、その下位に横位の貝殻による押引き文を施すもので、前平式に先行するものであるとの所見も得ている⁽⁴⁾。I類はヘラ状工具による爪形文を特徴とするもので、現時点では類例を見出せなかった。早期でもかなり古い段階か、或いは草創期にまで遡る可能性も検討しなければならない。III類は縄文円筒土器で、県下では五十市遺跡等に類例がある。II類 i は下剥峰式土器とみられる。II類 h'・j は貝殻刺突文による綾杉文を施すもの、横位の刺突線文を施し口縁部が内傾するもので、IV類を含めておおよそ桑ノ丸式に収まるものとみられる。V類とVI類は手向山式土器である。これらの他、平拵式土器・塞ノ神式土器も出土しており、早期の前葉から後葉にかけてのバラエティに富んだ様相を見る結果となつた。

後期は土坑とそれに伴う土器が出土したのみである。円形で底にピットを配する土坑は関東地方において多く類例がみられ⁽⁵⁾一般的に貯蔵穴として認識されているが、当遺跡においては、ややすく鉢状を呈するものもあり他の用途を考える余地もある。土器(64)は口縁部が外反するのに対し、(65)は直立するという点で異なるが施文の手法・内面調整等については大差はみられない。(67)の器形は北久根山式にもやや類似するものである。

以上、砂田遺跡の調査では当町において初例の資料を多く得ることがで
きたが、未整理・未掲載の資料についても詳細な検討を行う必要があり、
これを報告書作成時の課題としたい。

- 註①) 1990.10 宍戸章氏の所見
(2) 新東晃一「早期九州貝殻文系土器様式」縄文土器大観1. 小学館1989
(3) (2)に同じ
(4) 1991.3 新東晃一氏の所見
(5) 1989 「多摩ニュータウン遺跡」ほか

<田野町教育委員会刊行の関係図書>

- 「芳ヶ迫第1遺跡概要」田野町文化財調査報告書 第1集 1984(縄文早期)
「芳ヶ迫第2・第3遺跡・札ノ元遺跡概要」 第2集 1985()
「芳ヶ迫第1・第2・第3遺跡・札ノ元遺跡」 第3集 1986(旧石器・縄文早期・中世)
「丸野第2遺跡概要」 第4集 1987(縄文早期・後期)
「丸野第2遺跡概要 2次調査」 第5集 1988(縄文後期・弥生後期)
「長森遺跡概要」 第6集 1989(縄文早・前期)
「八重地区遺跡発掘調査概要」 第7集 1989(縄文早期・弥生)
「合子ヶ谷遺跡」 第8集 1989(平安)
「前畠第1遺跡発掘調査概要」 第9集 1990(縄文早期)
「田野町遺跡詳細分布調査」 第10集 1990
「丸野第2遺跡」 第11集 1990(縄文早期・後期・弥生後期/他)

<田野町内遺跡関連文献>

- 「宮崎県田野町青木遺跡の調査」日本考古学協会第28回大会研究発表要旨 1963
「九州自動車道(宮崎線)関係遺跡分布調査報告書」宮崎県教育委員会 1968
田中茂「宮崎郡田野町灰ヶ野地下式横穴」宮崎県総合博物館研究紀要No.1 1972
「田野町灰ヶ野地下式古墳発掘調査報告書」宮崎県文化財調査報告書第17集 宮崎県教育委員会 1973
「黒草遺跡」九州縄貫道埋蔵文化財調査報告書(3) 宮崎県教育委員会 1979
「高野原地下式1号墳発掘調査」宮崎県文化財調査報告書第24集 宮崎県教育委員会 1981
「前平地区遺跡発掘調査報告書」宮崎県文化財調査報告書第26集 1983

写 真 図 版

(前畠第2遺跡)



B・C区全景



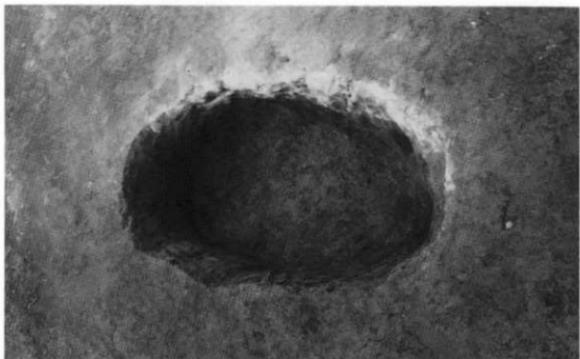
A区全景

图版 2



B 区 全景

图版 3



B 区 土坑 4 检出状况



C 区 全景



C 区 集石 4 检出状况

図版 4



C 区集石棟出状況



C 区溝1 断面

図版 5



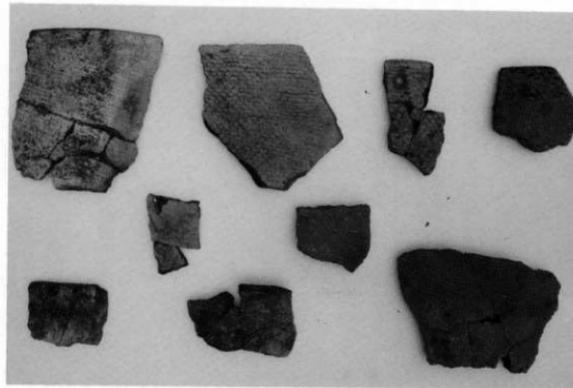
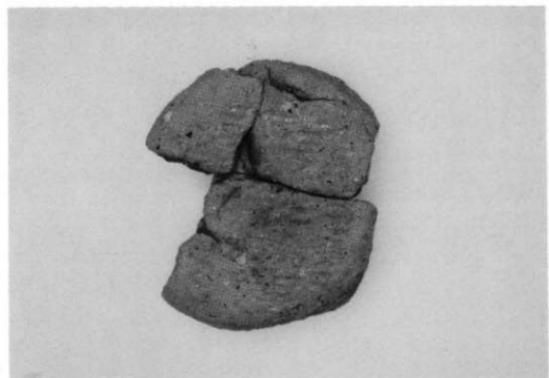
縄文時代早期の遺物



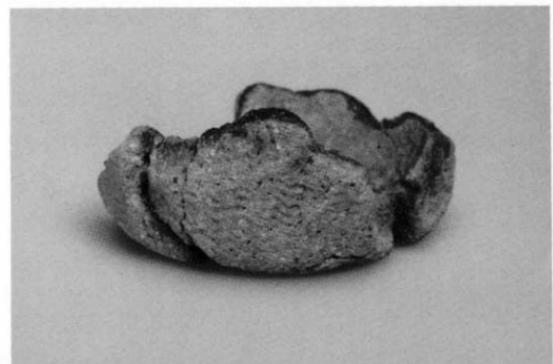
図版6



図版7



縄文時代早期の遺物



縄文時代早期の遺物

図版
8



図版
9



縄文時代早期の遺物



縄文時代早期の遺物



A区東壁土層断面



条痕文土器出土状況

写 真 図 版

(砂 田 遺 跡)



調査区全景

图版
12



A区遺物出土状況

图版
13



E区遺物出土状況



B区遺物出土状況



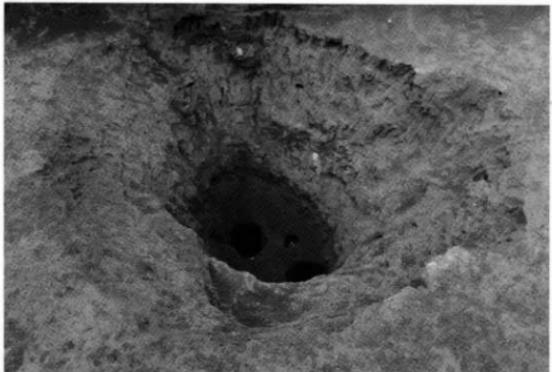
F区遺物出土状況

図版
14



確認トレンチ全景

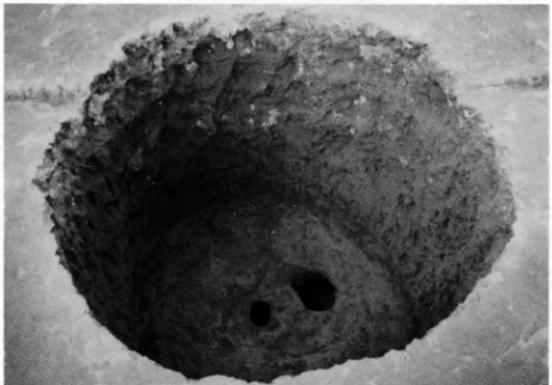
図版
15



土坑 18 検出状況



土坑 18 遺物出土状況



土坑 9 検出状況

図版
16

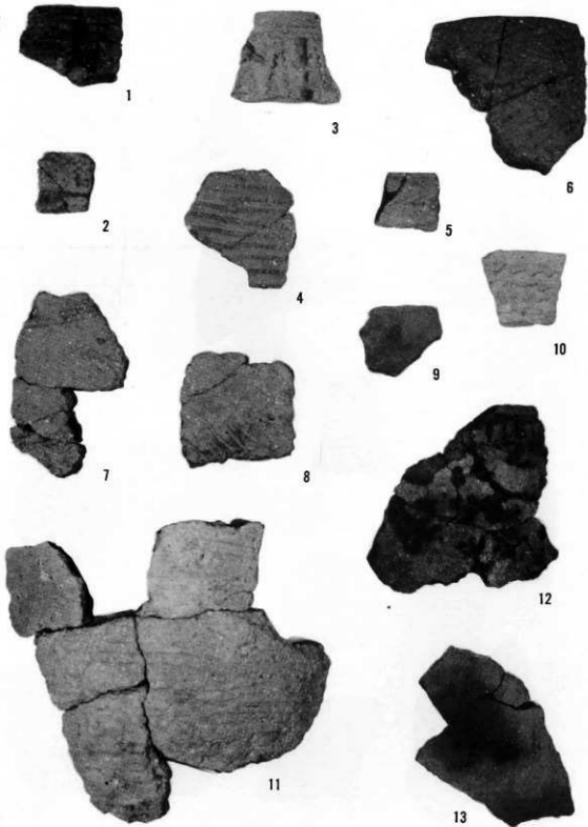


集石 1 検出状況



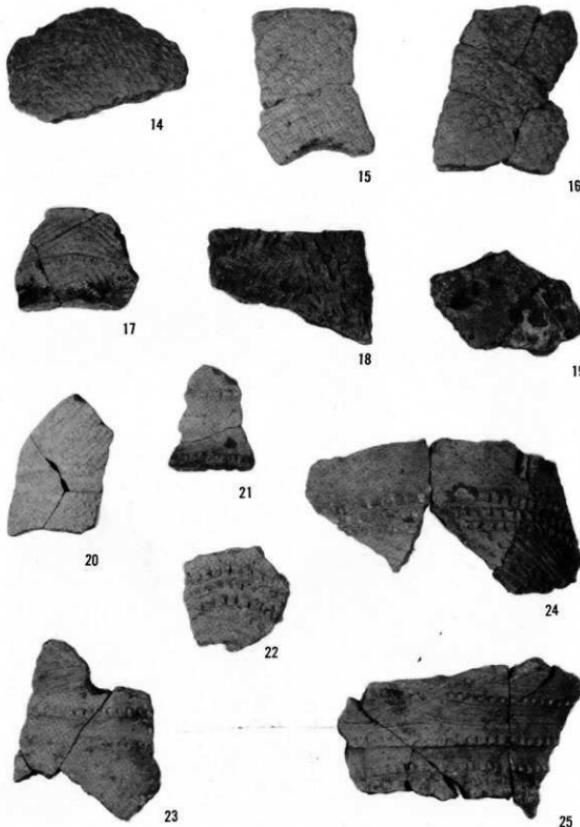
集石 7 検出状況

図版
17



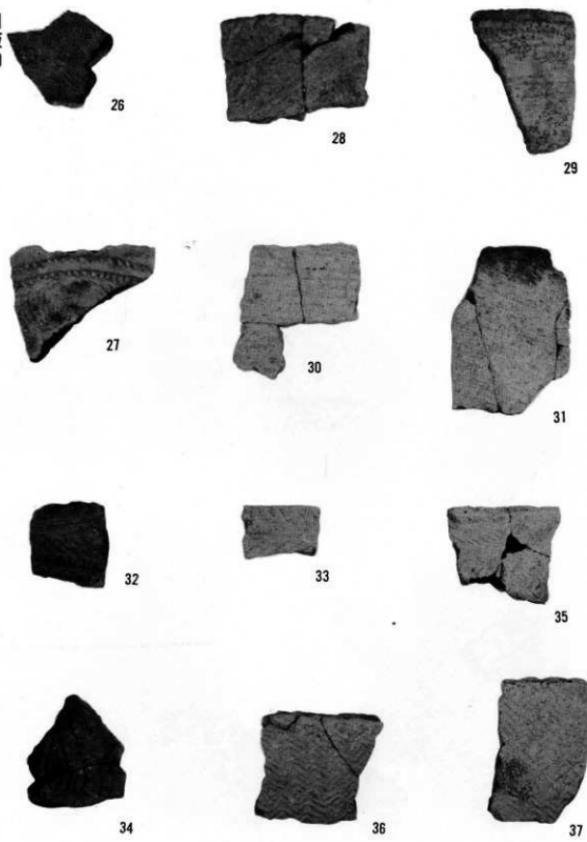
A 区の出土遺物

図版
18



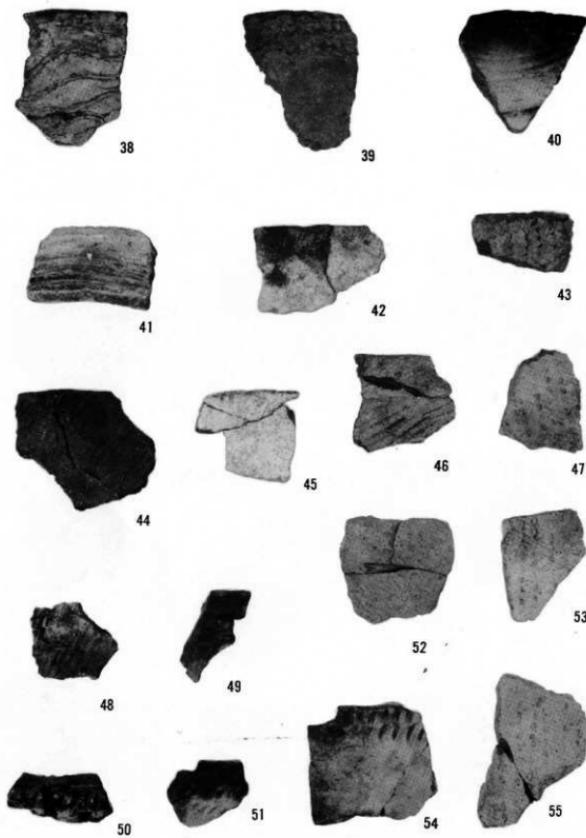
B区の出土遺物

図版
19



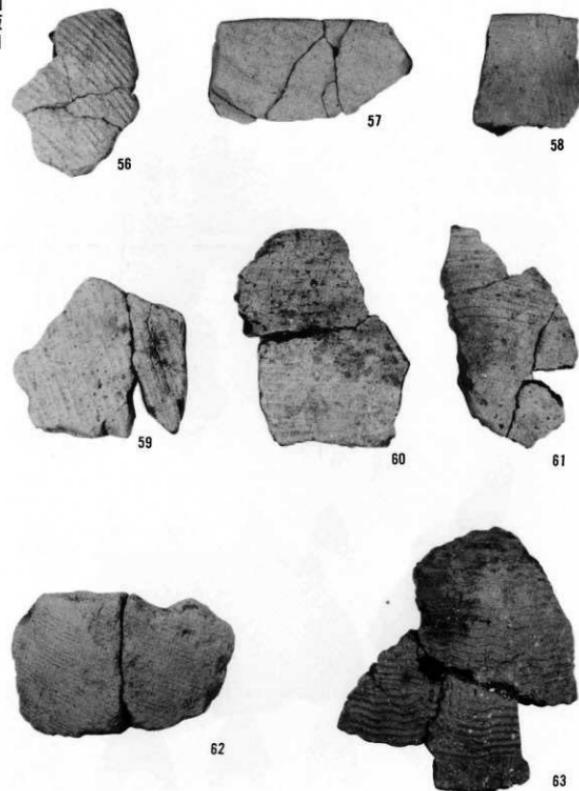
C・D・E区の出土遺物

図版 20

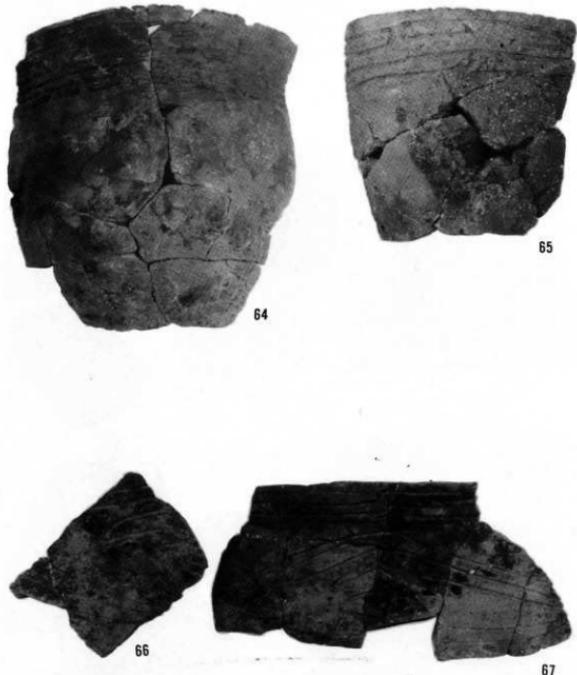


F 区の出土遺物

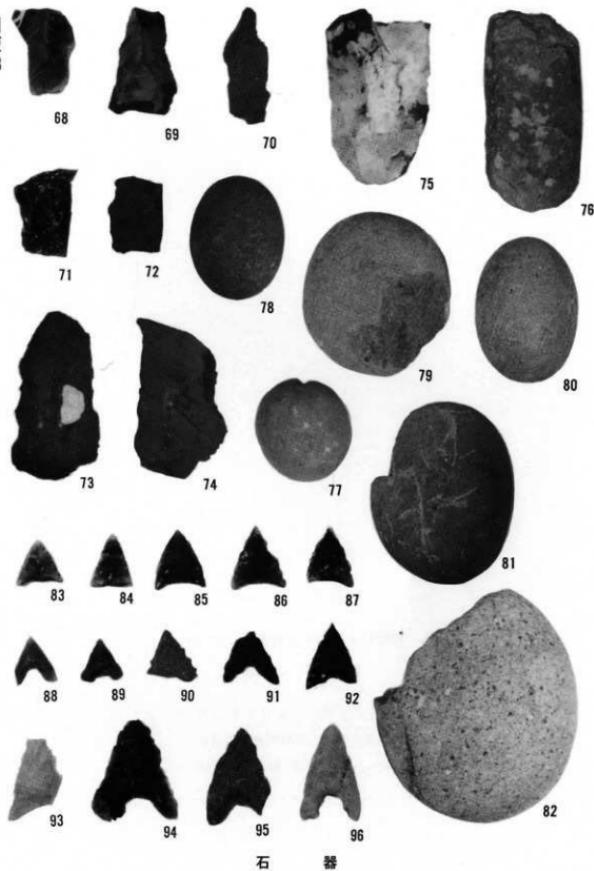
図版 21



F 区の出土遺物



縄文時代後期の遺物



田野町文化財調査報告書 第12集

前編第 2・砂田遺跡

発行年月 1991年3月

編集・発行 田野町教育委員会

印 刷 (有)昭和印刷

